

山口県埋蔵文化財調査報告第90集

# 花岡遺跡

1986

下松市土地開発公社  
山口県教育委員会

## 序

下松市土地開発公社は、周南新設高校建設造成工事に伴い、その予定敷地内にある遺跡について、山口県教育委員会と協議し、昭和60年6月上旬から61年1月下旬にかけて、下松市大字末武上字屋根下ほかにおける花岡遺跡の発掘調査を実施いたしました。

本書は、この発掘調査の記録であり、これが埋蔵文化財に対する認識と理解を深めるとともに、教育・学術のため広く活用されることを期待するものであります。

なお、この発掘調査および本書の編集は、山口県教育委員会に委託して実施したものであり、ここに関係各位の御尽力に対し、深甚なる謝意を表すものであります。

昭和61年3月

下松市土地開発公社

理事長 宮本義則

## 序

本書は、周南新設高校建設造成工事に伴い、下松市土地開発公社の委託を受けて、山口県教育委員会が実施した発掘調査の記録であります。

周南新設高校は、昭和62年度以降の下松市と徳山市及び周南都市の高等学校入学者数の増大に対処するための新たな学園として、その完成が各方面から期待されております。

県教育委員会では、その建設地の造成工事に先立って、埋蔵文化財保護の立場から下松市土地開発公社と協議を重ね、昭和60年6月上旬から61年1月下旬にかけて、花岡遺跡の発掘調査を実施いたしました。

御承知のとおり、山口県は「あたたかいふるさとづくり」を県政の柱として推進しておりますが、未来に向けて発展する新しい県づくりの基盤には、私たちの祖先が長年育み培ってきた風土と歴史の支えがあってはじめて、勇気ある前進が生まれるものであります。

今回の調査を通して、古くから山陽道の要衝として栄えてきた下松市花岡地区の一画に、古墳や中世の墳墓が確認され、ふるさとの歴史に新しい事実を付け加えることができました。

この遺跡は、やがて高等学校の建設により、永遠にその姿を消してしまいますが、ここに発掘された数々の歴史的資料は、県民の手によって新たに教育・学術・文化の振興のために広く活用され、新しい県づくりに生かされるものと確信いたすものであります。

終わりに調査の実施および報告書の作成にあたり、御指導・御助言いただいた関係各位に対し、深く敬意を表する次第であります。

昭和61年3月

山口県教育委員会

教育長 高山 治

## 例 言

1. 本書は、山口県下松市大字末武上字屋根下ほかに所在する花岡遺跡に関して、周南新設高校建設造成工事に先立って実施した埋蔵文化財調査報告書である。
2. 現地調査は、山口県教育委員会が下松市土地開発公社の委託を受けて昭和60年6月5日から61年1月23日まで実施した。
3. 調査は、山口県教育委員会文化課兼山口県埋蔵文化財センター指導主事三戸田晃司、河島 清、谷口哲一が担当し、同センター次長中村徹也・文化財専門員乗安和二三の応援を得た。
4. 調査にあたっては下松市立花岡小学校をはじめ地元関係各位から多大の援助・協力を得た。
5. 本書掲載の地図は、国土地理院発行の25,000分の1の地形図「徳山」・「呼坂」・「笠戸島」・「光」を複製したものである。
6. 本書に使用した方位は国土座標の北で標示し、レベルは海拔標高である。
7. 石材の鑑定については、山口県立博物館学芸員橋本恭一氏の御指導による。
8. 出土遺物の整理については、山口県埋蔵文化財センター長沼昭乃・岡田洋子・増田真由美・岩崎悦子・大村真澄・田良倍美・葛山清美・永久早苗の協力を得た。
9. 本書の執筆・編集は、中村の指導・助言を得て三戸田が担当した。

## 本 文 目 次

I 調査に至る経緯	1
II 位置と環境	1
III 調査の概要	4
IV 遺構	7
1. 花岡3号墳	7
2. 集石遺構	9
3. 土壇	10
4. ビット	10
V 遺物	10
VI 小結	13

## 挿 図 目 次

1. 遺跡の位置と周辺の主な遺跡	2
2. 調査区設定図	3
3. 遺構配置図	5
4. 花岡3号墳主体部	6
5. トレンチ土層図	7
6. SK101 実測図	8
7. SX101・SX102・SX103・SX104・SP103 実測図	10
8. SP101・SP102・SP104 実測図	10
9. 土器・石製品実測図	11
10. 鉄器実測図	13

## 図 版 目 次

図版 1	上：調査区遠景（南から）、下：I-N区調査全景（西から）
図版 2	上：I-N区トレンチ全景（北から）、下：I-S区トレンチ全景（北から）
図版 3	上：左 II区全景（南から）、右 III区トレンチ（北から） 下：左 IV区トレンチ（北から）、右 VII区トレンチ（北から）
図版 4	上：V区トレンチ（北から）、下：IV区トレンチ（西から）
図版 5	上：花岡3号墳（北から）、下：同鉄器出土状況（西から）
図版 6	上：SX101（西から）、下：SX102（南から）
図版 7	上：SX501（北から）、下：SX502（北から）
図版 8	上：SX101・SP103・SP104（南から）、下：SP101・SP102（南から）
図版 9	土器・石製品
図版 10	鉄器

## I 調査に至る経緯

下松市・徳山市および周南都市の昭和62年度以降における高校入学者数の増大に対処するため、下松市大字末武上字屋根下ほかの地に、周南新設高校の建設が山口県教育委員会によって計画された。

この建設計画に基づき、山口県教育委員会は「高校建設に関する事前審査会」を開き、各課に意見書の提出を求めた。県教育委員会文化課は、建設造成工事予定地内における周知の遺跡の存在とその子察調査の必要性を回答した。

この意見書に基づき、昭和59年11月21日から28日の5日間にかけて子察調査を実施したところ、当該地は近世以降に墓地の造成などに関わる地形の改変によって遺跡の残存状況は良好とは考えられないが、発掘調査を実施する必要のある箇所が数か所認められることを確認した。

この子察調査の結果を基に、昭和60年4月上旬に山口県教育委員会総務課・同文化課および下松市土地開発公社は三者協議を行い、当該地の建設造成工事は下松市土地開発公社が担当すること、発掘調査は地形改変の比較的小さい地域にしばって県教育委員会文化課によって実施することで了解した。

同年4月1日、下松市土地開発公社と山口県教育委員会との間で「発掘調査委託契約」が締結され、4月12日現地確認と発掘調査に関する具体的な段取りを決定した。

同年6月5日、調査に着手した。

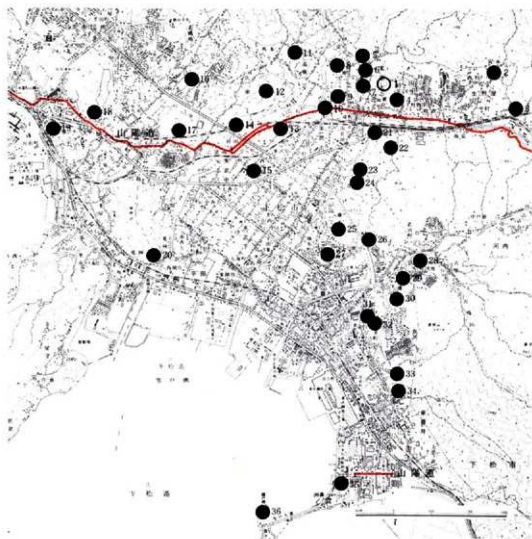
## II 位置と環境

花岡遺跡は旧来弥生時代の遺物包含地として周知されてきたが、弥生時代から近世期に至る各時代の遺構が重複している複合遺跡である。行政上は下松市大字末武上字屋根下ほかの所在する。当地は古くからの地名にちなみ「花岡<sup>1)</sup>」地区と通称され、下松市街地の北方約2km、現海岸線の北方約4kmの距離にある。烏帽子岳山地の南に東西に帯状に分布する熊毛丘陵地帯の西南部の低丘陵地帯（標高100m以下）を占め、地質的には中生代の花崗岩質岩石からなる風化の進んだきわめて起伏の小さい丘陵<sup>2)</sup>である。「花岡」地区の南には平田川と末武川の沖積作用によって形成された下松低地が展開する。標高3m以下の低地が近世以降の干拓地とすれば、当地は現在よりかなり海に迫っていたものとみてよい。

花岡遺跡は、この熊毛丘陵西南部の下松市街地にむけて延びる低丘陵の突端部、通称亥子山と呼ばれる舌状丘陵とその東に平走する2列の丘陵および谷筋に位置する。

下松市においては、沖積地縁辺の丘陵一帯に弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が多く立地<sup>3)</sup>し、当遺跡の周辺においても、東隣に上地遺跡<sup>4)</sup>、上地丘陵上遺跡<sup>5)</sup>、花岡古墳群<sup>6)</sup>、南接

して花岡古墳<sup>7)</sup>（前方後円墳）が位置する。また、南約8kmの海岸から突き出た陸繋砂洲上に立地する宮ノ洲古墳<sup>8)</sup>は、三角縁盤龍鏡を含む4面の舶載鏡・鍬・鉄斧・土師器などを出土した県内有数の前方後円墳である。こうした遺跡の存在は、当地一帯が律令体制以前において「都怒国」の中心地域の一つであったことを窺わせる。古代には、「和名抄」の久米郷・生野屋郷に含まれ、生野屋郷には山陽道の駅屋が置かれた。中世には、末武保・切山保・鷺津庄があり、当地に比定される末武保はのちに末武庄と呼ばれるようになった。このように当地は古代・中世を通じて、山陽道の要衝として栄えるとともに、近世に至っては、花岡市を中心に、御茶屋・勤場として栄えた。



第1図 遺跡の位置と周辺の主な遺跡

- 1花岡遺跡 2宮本遺跡 3西条遺跡 4花岡古墳 5上地丘陵上遺跡 6花岡1号墳 7花岡2号墳 8上地遺跡 9福寺遺跡 10上広石遺跡 11日天寺古墳群・耳取古墳 12向原古墳群 13広石遺跡 14宮原遺跡・宮原古墳 15市仏遺跡 16伏本遺跡 17久米市遺跡 18しらむが森祭祀遺跡 19稲荷山古墳 20荒神山古墳 21南花岡遺跡 22為豆古墳 23常森古墳 24城山遺跡 25尾尻遺跡・尾尻古墳 26御屋敷山遺跡・御屋敷山古墳 27天王森遺跡・天王古墳 28大河内遺跡 29昭和通り遺跡 30瀬々浴遺跡 31都町遺跡 32都町北遺跡 33寺道遺跡 34寺道古墳 35宮ノ洲古墳 36瀬戸石橋





### III 調査の概要

花岡遺跡は、下松市大字末武上字屋根下ほかに所在し、熊毛丘陵の南へ派生する亥子山（西側丘陵）とそれに平走する2列の小高い丘陵（標高56～80m）、およびそれらに挟まれた2本の谷筋に立地する。調査区の北辺は米川地区に通じる県道鹿野線によって画される。昭和59年度に実施した予察調査においては弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・瓦器・磁器などの破片が検出されたが、いずれも磨耗が著しい。

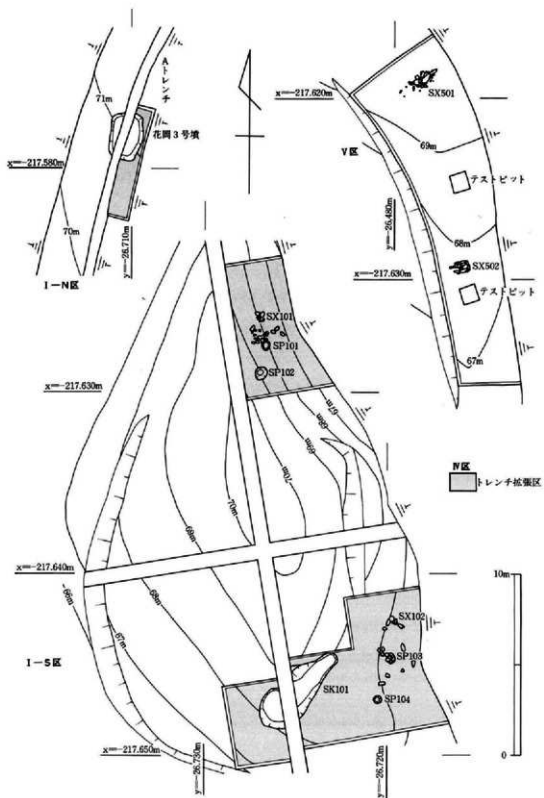
調査区は、南北300m、東西360mと広範囲におよび、そのうち西側丘陵の南半、中央の丘陵は大部分が近世期以降の墓地として、また2本の谷筋は水田・畑地として利用され旧地形の改変が著しい。そのため、予察調査の結果比較的地形の改変が少ないと思われる東西の丘陵および東側の谷筋地域に限定して調査を実施することにした。

調査に際しては、調査区の西側丘陵を基点として東へⅠ～Ⅵ区と呼称し、最後に調査した西側丘陵の南端、花岡小学校に北接する丘陵についてはⅦ区と呼称した（第2図）。

調査方法としては、先ずトレンチやテストピットによって部分発掘を行って遺構の確認をしたのち、遺構が残存している場合は必要に応じてトレンチを拡張する方法をとった。

調査は8月から10月までの造成工事の進捗状況に合せての中断をはさんで、昭和60年6月5日から61年1月23日まで実施した。

西側丘陵の東に山道を挟んで対峙するⅡ・Ⅲ区は、それぞれ後世に楡林および段々畑に改変されいづれも地山面がかなり削平を受け、遺構は検出できなかった。削平の状況や地形図等を考え合せると、Ⅰ区（西側丘陵）の原地形は東および北東に下る傾斜面とみられる。このようにⅠ区は東斜面が大規模な地形改変を受けているとともに、西側斜面においても後世の水田開発によって段階状に改変され、現在のような瘦せ尾根になったとみられる。したがって、Ⅰ～Ⅳ区で検出された古墳の墳丘は明確にとらえることはできなかった。（なお、本古墳の西側丘陵、花岡八幡宮がある通称八幡山に花岡1・2号墳が存在するので、本古墳は花岡3号墳と称する。）中央の尾根と東側の尾根に挟まれたⅣ区は現在は階段状の水田として利用されており、近世以降2度にわたって耕地が拡張されている。原地形はきわめて狭い谷筋とみられ、遺構は検出されなかった。東側の丘陵においても地形の改変がなされており、Ⅴ区は楡林によって、Ⅵ区は西側斜面は段々畑に、東側斜面は土取りによってそれぞれ開削されている。また、調査前において墳丘状の地形を示したⅦ区においては、現在の墓地の下に遺構が残存するものと予測したが、地表下ほぼ1.5m近くまで攪乱を受けており、遺構は全く残っていなかった（第2図）。基本的層序（第5図）は、丘陵部では、1：表土、2：濁黄褐色土、3：橙色粘質土（花崗岩バイランド）、4：淡黄褐色土（地山）からなる。谷筋では、1：表土（耕土）、2：濁黄褐色土（盤土）3：暗褐色土（客土）からなり、谷頭付近ではその下に更に耕土、盤土がみられ、これは水田面の2度にわたる拡張の結果と思われる。



第3図 遺構配置図

遺構は、I-N区、I-S区、V区の3地区において検出され、古墳1・集石遺構4・土壇1・ピット4などがある(第3図)。

土壇墓は古墳に伴う主体部とみられるが、古墳の墳丘や形状や規模についてはこれまで述べてきたように地形の改変が著しく、推定することは極めて困難である。集石遺構は五輪塔の形式から室町後半のものともみられ、ピットについてもほぼ同時期のものと考えられる。

## VI 遺 構

### 1 花岡3号墳(第4図)(図版5)

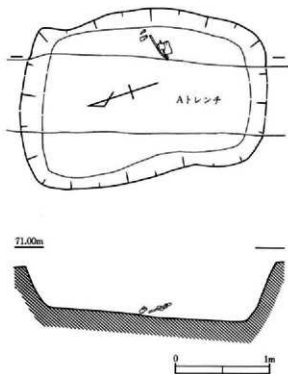
西側丘陵北尾根(I-N区)の丘頂部から約50mほど下った標高72mの緩斜面に位置する。付近にはこれに関係する他の遺構は存在しない。

この土壇墓のすぐ東側は山道工事や畑の切削によって切り立つ崖面となっており、西側も5m程度の緩やかに傾斜する平坦面を残してその先は人工的な開削により崖面である。したがって、墳丘の規模を推定するのはきわめて難しい。しかも土質は花崗岩バイラン土からなるきわめて流出しやすい土壌で、地表面はかなり深くまで植林によって攪乱をうけている。トレンチ土層断面においても墳丘の盛土と考えられる確実な土層は確認

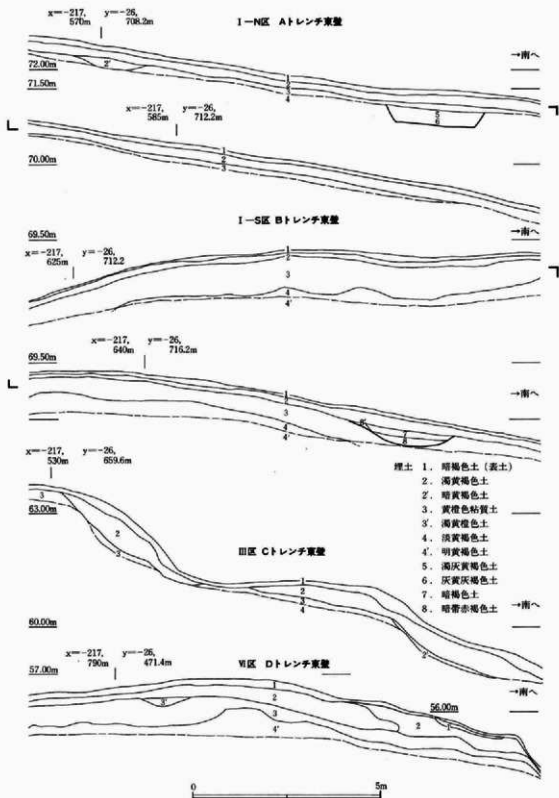
できなかった。しいて墳丘規模を推定するとすれば、西側に残された5m程度の平坦面の広がりかほぼ原地形をとどめているものと仮定して、径10m程度の円墳を想定できよう。その場合、本土壇墓の北6mの地点で検出した小型丸底壺は本古墳に伴う遺物とみてよい。

南北トレンチの東壁に鉄器片が検出され、層序を入念に観察した結果U字状の落込みが検出されたのでその周囲を拡張して掘り入りこんだ。

長さ2.6m、中央部幅1.8mの隅丸方形に近いプランの掘り方で、深さ0.6m。主軸方向は尾根に沿って南北を示す。壁面はほぼ垂直に近く、西壁の南隅はやや上方が内側に張り出す。床



第4図 花岡3号墳主体部実測図



第5図 トレンチ土層図

面は地形に沿ってやや南方に傾斜する。土壇内には、暗黄褐色土が埋積し、土壇の東側床面には、斧頭2・鎌・鋤先・鎌・壺状鉄器・鉄などの鉄器7点が一括して検出された。木棺直葬とみられるが、木棺は腐朽して残っていない。

遺構の時期としては、鉄器の形式および上述の土師器から、古墳時代前半期に属するものと考えられる。

## 2. 集石遺構

### SX101 (第7図)(図版6)

西側丘陵の南尾根(I-S区)北斜面に位置する。五輪塔の空風輪と火輪の周囲に人頭大の円礫が径約2~3mの範囲にまとまって検出された。明確な掘り方をもたない。この礫群に混って鎌倉時代とみられる瓦器のおね鉢と須恵器系陶器の甕の破片が出土した。

遺構の時期は、五輪塔の形式からみると室町時代のもと考えられ、上記の遺物からみた年代観と隔たりがある。

### SX102 (第7図)(図版6)

西側丘陵の南尾根(I-S区)丘頂部に位置する。人頭大の円礫が径約2~4mの範囲に検出された。明確な掘り方をもたない。遺物は出土していない。遺構の時期を決定する資料としては不十分ではあるが、集石の状況がSX101と類似していることからすると室町時代の遺構と考えられよう。

### SX501 (第7図)(図版7)

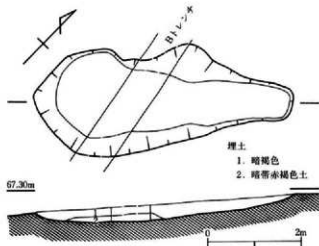
東側丘陵の北尾根(V区)南斜面に位置する。人頭大の円礫が径約2~3mの範囲にまとまって検出された。明確な掘り方をもたない。遺物は出土していないので遺構の時期を決定し難いが、集石の状況がSX101と類似していることからすると室町時代の遺構と考えられよう。

### SX502 (第7図)(図版7)

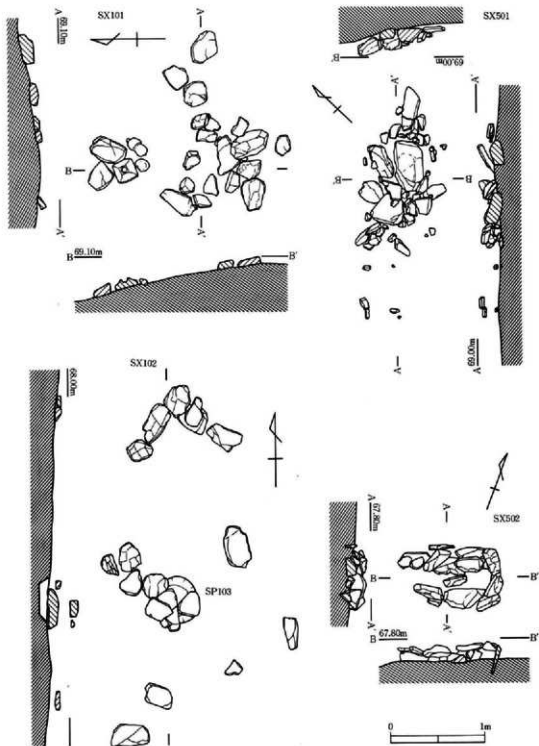
東側丘陵の北尾根(V区)南斜面に位置する。人頭大の円礫が“コ”の字状に検出された。明確な掘り方をもたない。遺物は出土してなく、遺構の形状も上述の集石遺構と明らかに異なるが、遺構の時期はSX101との石材の類似性から室町時代のもと考えてよいであろう。

## 3 土壇

### SK101 (第6図)(図版8)

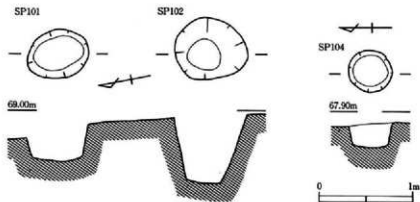


第6図 SK101実測図



第7图 SX101·SX102·SX103·SX104·SP103实测图

西側丘陵の南尾根（I-S区）丘頂部に位置する。長径約5m、短径2mの不整長円形を示し、深さは0.2mである。埋土は2層からなる。遺物は検出されていなく、遺構の時期は不明である。



第8図 SP101-SP102-SP104実測図

#### 4 ビット

##### SP101 (第8図)(図版8)

西側丘陵の南尾根（I-S区）北斜面上でSX101に南接して検出されたものであるが、SX101に関連するものではない。径65cmの不整円形を呈し、深さ35cm。埋土は暗黄褐色土で、遺物は検出されなかった。

##### SP102 (第8図)(図版8)

西側丘陵の南尾根（I-S区）北斜面上に位置する。SP101の南1mの地点で検出された。径75cmの不整円形で、深さ70cm。埋土は暗黄褐色土で、土師器の甕（第15-3図）が検出されたが、出土状況から流れ込みと考えられる。時期は不明である。

##### SP103 (第8図)(図版8)

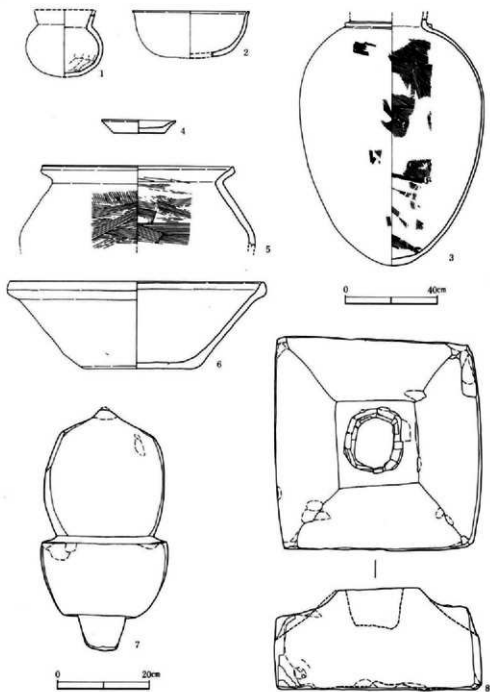
西側丘陵の南尾根（I-S区）丘頂部、SX102の集石の下面で検出されたが、SX102と一連のものである可能性はない。径50cmの不整円形を呈し、深さ10cm。遺物は検出されていなく、時期・性格ともに不明。

##### SP104 (第8図)(図版8)

西側丘陵の南尾根（I-S区）丘頂部に位置し、SP103の南3mのところ検出された。径45cmの不整円形を呈し、深さ25cm。埋土は暗黄褐色土で、遺物は検出されなかった。

## V 遺物

本調査で出土した遺物には、弥生土器・土師器・陶磁器・土師質土器・瓦器質土器などの土



第9図 土器・石製品実測図

- 1～3土師器 (1 I-N区拡張区、2 I-N区Aトレンチ、3 I-S区拡張区)  
 4土師質土器 (Ⅲ区Cトレンチ) 5須恵器系陶器 (I-S区拡張区) 6瓦器  
 (I-S区拡張区) 7・8五輪塔 7は空風輪 8は火輪 (SX101)



器のほか、鉄斧・鉄刀・鉄釘・石塔類などがあり、弥生時代から近世以降のものまで多岐にわたる。土器はほとんどが小さい破片であり、図化できるものはきわめて少ない。ここでは、復原して図化できたものはすべてとりあげた。

#### (1)土器 (第9図)

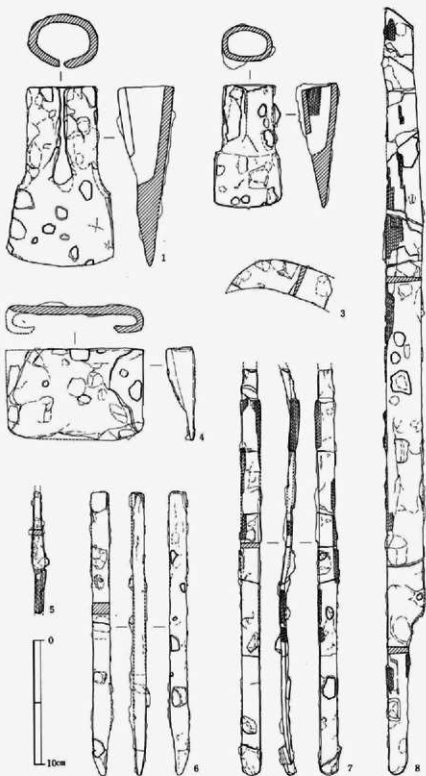
1・2は土師器。1は小型丸底壺で、口縁端部と底部の一部を欠く。内外面とも磨耗が著しく、底部内面に指ナデの痕を残すのみ。復原口径6.6cm、器高7.3cm。古墳時代前期に属するものである。2は瓠で底部を欠く。口縁端部は短く外反し尖りぎみ。内外面とも磨耗が著しく、調整不明。復原口径12.8cm、器高5.2cm。古墳時代前期に属す。3は甕で、口縁を欠く。頸部に一条の中凹みの断面三角の突帯が付く。底部は丸底。内外面とも斜方向のハケ目を残す。胴部最大径は肩部付近にあり、やや肩のはる大型のタイプである。胎土は砂粒を多く含み焼成は堅緻。古墳時代初頭<sup>1)</sup>に属すると考えられる。4は土師質土器の皿。底部は糸切り。復原径8.1cm、底径5.7cm、器高1.5cm。室町時代末に属するものである。5は須恵器系陶器の甕で、復原口径20.8cm。「く」の字状に外反する口縁の端部をつまみあげている。内外面ともにヨコハケ目調整で、色調は暗い灰青色を呈し焼成良好。鎌倉時代に属するものである。6は瓦質土器のこね鉢で片口がつくと思われる。口縁端部は玉縁状に肥厚する。復原口径27.6cm、底径12.2cm、器高9.5cm。内外面ともに不整方向のナデ、外面はヨコナデ調整、色調はともに青灰色で、焼成は堅緻。鎌倉時代に属する。

#### (2)石製品 (第9図)

7・8は五輪塔である。7は空風輪で、頂部端を欠いているが、側面を削りそいだ肩ばり形<sup>2)</sup>の宝珠形を示す。現在高26.7cm、空輪胴部最大径14.1cm、風輪胴部最大径15.1cmを測る。8は火輪。軒はわずかに反りぎみで、四隅の先端に面取りを施す。上面に柎穴が削り込まれ、下面の水輪との接合部も浅く削られて凹んでいる。高さ11.2cm、下面幅23.1×22.5cm、上面幅9.5×9.1cm。室町時代後半<sup>2)</sup>のものである。

#### (3)鉄製品 (第10図)

9から15は古墳出土。16は古墳の北約5.0mの地点から出土。古墳に共存する可能性がある。9・10は斧頭。ともに刃部をつけた鉄板の上方を折り曲げて、木柄を装着する中空の袋部を造り出した鍛造品。有肩式で、9は刃幅9.5cmの大型品、10は刃幅5.6cmの小型品。刃先は弧字形で、一方向に使用痕がかたよる。また刃部は、9は両面から10は片面から刃がつけられており、後者は手斧の可能性が強い。11は鋤先。横に細長い鉄板を左右から折り返して袋部をつくり、下縁に刃をつけたもの。左側の折り返し部を欠く。上部右側の折り返し部の幅は2.0-0.9cm。12は鎌。刃部先端を欠くが、刃の側に刃部が曲がり先が尖るタイプである。基部を欠く。刃部の幅は2.6cm、背の厚さ0.4cm。13は鍬。距と茎の一部で距先端から基端にかけて釣鐘状に膨らみ、茎には木質が付着。14は鋳鉄器。棒状を呈し、先端はわずかに「ノ」の字状に湾曲しつつ四角錐状に尖り、端部には被打撃面、基端には打撃面を残す。全長22.8cm、幅1.2cm、



第10図 鉄器測図

1・2 弁 3 鋤 4 鎌 5 鋸 6 鋸状鉄器 7 鍬 8 直刀 (1-6ST101, 71-NEAトレンチ)

厚0.9cm。15は鈍。峰部の先端を欠く。峰部と基部ともよじれている。峰部は片側にゆるく反り、両側に刃をつける、いわゆる裏すきと反りのあるタイプである。残存長は31.7cmもある大型品である。基部は幅1.4cm、厚0.4cm。基部の末端付近に別の鉄製品が付着している。16は直刀で片開。刀身は平棟平造りで反りはない。刃部長48.9cm、幅3.0cm、最大厚0.6cm。刃部・基部ともに木質が付着。刃部先端がやや折れ曲がっているほか、全体としての残存状況は良好である。

- 注 1) 底部が丸底である点から土師器とみられる。全体のプロポーショナルとしては、東部九州の安国寺式のものにちかいが、肩がはる点と丸底の点が異なる。
- 2) 文献27。

## VI 小 結

本調査で検出された遺構には、古墳・集石遺構・土壇のほか4基のピットがある。古墳のほかに室町時代後半に属するものと推定される。

I-N区で検出した遺構は南北に主軸をもつ古墳の主体部と想定されるが、東西両斜面が人工的に切削された崖面であるとともに、花崗岩の風化したバイランドからなるため墳丘の盛土が流出してしまったため墳丘は残っていない。しかしながら、出土した古墳時代前期のものと考えられる鉄製品の一括遺物は、山口県内でもきわめて貴重な資料を提出してくれた。

県内において古墳時代前半期の鉄製農具を出土した主な古墳<sup>13)</sup>としては、下関市海老田石棺<sup>2)</sup>・若宮古墳<sup>3)</sup>、山陽町長光寺山古墳<sup>4)</sup>、山口市天神山古墳<sup>5)</sup>・赤妻古墳<sup>6)</sup>・兜山古墳<sup>7)</sup>、徳山市岡ノ原古墳<sup>8)</sup>、新南陽市御家老屋敷古墳<sup>9)</sup>、下松市宮ノ洲古墳<sup>10)</sup>、田布施町大波野・天王原古墳<sup>11)</sup>、平生町白鳥古墳<sup>12)</sup>などを挙げることができる。弥生時代終末の遺跡<sup>13)</sup>を含めてもその数はきわめて少ない。また、本古墳のように多種にわたる鉄器を出土した遺跡はみられない。今回発掘した花岡3号墳は、さほど大きな規模の古墳であったとは考えられないが副葬されたこれらの一括鉄製品の存在は、鉄器を掌握できる力を持ったこの都怒地方有数の豪族の系譜の中に被葬者を考えることができる。南西に隣接する前方後円墳・花岡古墳の被葬者とのつながりも深いものと推測できる。

I-S区・V区で検出された集石遺構は、五輪塔の形式からみて室町時代の墳墓とみられるが、明確な掘り方はもたないため、「埋め墓」と考えるよりは「詣り墓」<sup>14)</sup>の一種とみなされよう。したがって、「埋め墓」は他所に求められる可能性が高い。ひるがえって、本調査区における現在の土地利用の在り方をみると、中央丘陵・西側丘陵の南半が墓域となっており、そのなかで最も古い墓は紀年銘からみて江戸時代中期にまで遡る。そうしてみると、本墓地の性格は近世以降に「詣り墓」から埋め墓へと変容したことがわかる。しかしながら、その契

機については不明である。

なお、本調査区の周辺においても五輪塔がみられる。西では、本調査区の西側丘陵（亥子山）とその東側の丘陵（八幡山）に挟まれた谷<sup>15)</sup>、東では東側丘陵の先端に数基存在する。

これらの遺構の分布状況は、かなり粗く、また、調査期間中に出土した遺物の絶対量もきわめて少ない。また、3本の丘陵に挟まれた谷筋は狭い谷頭水田を2時期にわたって耕地を広げて今日のような水田にしたものであることが発掘調査によって明らかになった。このように、本調査は特に近世以降から開発の手がくわえられてきて著しく地形が変容して今日に至っている。

- 注 1) 文献17に1979年現在における集成がなされている。
- 2) 文献17。
- 3) 刀・斧(文献3)。
- 4) ノミ状鉄器(文献4)。
- 5) 斧・鎌・鍬(文献24)。
- 6) 斧(文献28)。
- 7) 斧・手斧・手鎌(文献25)。
- 8) 刀・斧(文献5・6)。
- 9) 刀・斧・鍬(文献7・8)。
- 10) 文献17。
- 11) 斧(文献1・2・9)。
- 12) 北迫遺跡では鋳状鉄器が検出されている(文献10~16)。
- 13) 文献27。
- 14) 文献26。

- 文献 1 弘津史文 「周防の大古墳に就て」考古学雑誌 第11巻第2号 1921
- 2 弘津史文 「周防国熊毛郡上代遺物発見地調査報告書」 1927
- 3 下関市市史編集委員会編 「下関市史 原始一中世」 下関市役所 1968
- 4 長光寺山古墳調査団 「長光寺山古墳」 山口県厚狭郡山陽町埋蔵文化財調査報告書  
1集 1977
- 5 藤田 等 「山口県都濃郡竹島古墳」 日本考古学年報10 日本考古学協会 1963
- 6 島田貞彦 「周防国富田町竹島御家老屋敷古墳発見遺物」 考古学雑誌 第16巻第1号 1926
- 7 梅原東治 「周防国都濃郡下松町宮ノ洲発見の古墳」 歴史地理 第40巻第3号 1922

- 8 弘津史文 『防長漢式鏡の研究』 1928
- 9 平生町史編纂委員会編 『平生町史』 平生町役場 1978
- 10 下関市教育委員会 『綾羅木郷遺跡発掘調査報告Ⅰ』 1984
- 11 平生町教育委員会・山口教育委員会 『吹越遺跡第2次調査概報』 1972
- 13 井上山遺跡発掘調査団 『井上山』 1979
- 14 山口県教育委員会 『朝田墳墓群Ⅰ・木崎遺跡』 1976
- 15 宇部市教育委員会 『宇部の遺跡』 1968
- 16 小野忠彦 『墓・塚遺構を有する一古代村落址の研究』 山口大学教育学部記念論文集 1956
- 17 山口県立博物館編 『山口県内出土考古資料所蔵目録』 1979
- 18 下関市教育委員会 『秋根遺跡』 1977
- 19 『山口県の地名』 日本歴史地名大系36 平凡社 1980
- 20 山口県企画部企画課 『土地分類基本調査、徳山・光』 1978
- 21 中野一人 『先史文化』 『徳山市史 上巻』 1984
- 22 山口県教育委員会 『上地遺跡』 1973
- 23 山口県教育委員会 『山口県遺跡地区』 1973
- 24 山口市教育委員会 『天神山古墳』 1979
- 25 小野忠彦 『美濃方浜遺跡』 山口県文化財概要 第4集 1961
- 26 下松市教育委員会 『下松市の石造文化財』 1981
- 27 宮崎県教育委員会 『山内石塔群』 1984
- 28 弘津史文 『周防国赤妻古墳並茶臼山古墳(-)』 考古学雑誌 第18巻第4号 1928



上：調査区遠景（南から）

下：I区調査前全景（西から）



上：I-N区トレンチ（北から）

下：I-S区トレンチ（北から）



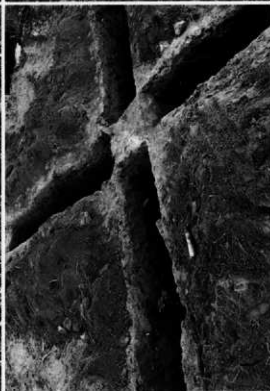
右 田区トレンチ (北から)



右 Ⅱ区トレンチ (北から)



上:左 Ⅱ区全景 (南から)



下:左 Ⅱ区トレンチ (北から)



図版 4



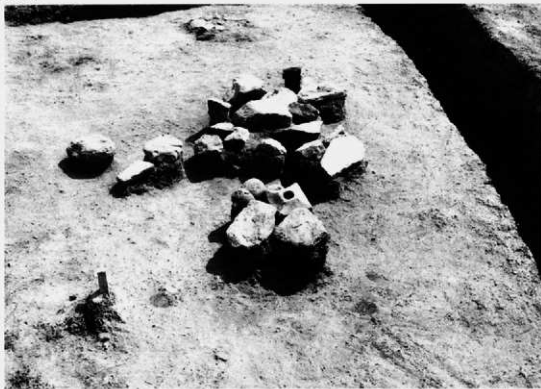
上：V区トレンチ（北から）

下：VI区トレンチ（西から）



上：花園3号墳（北から）

下：同鉄器出土状況（西から）



上：SX102（西から）

下：SX102（南から）



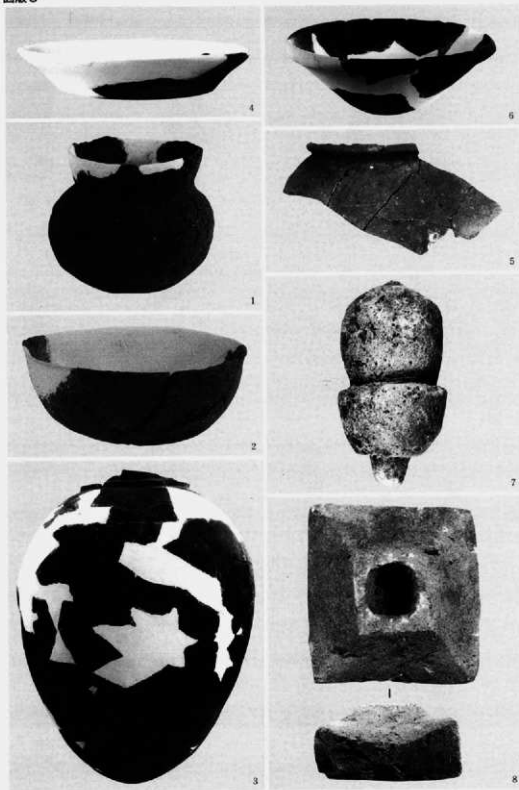
上：SX501（北から）

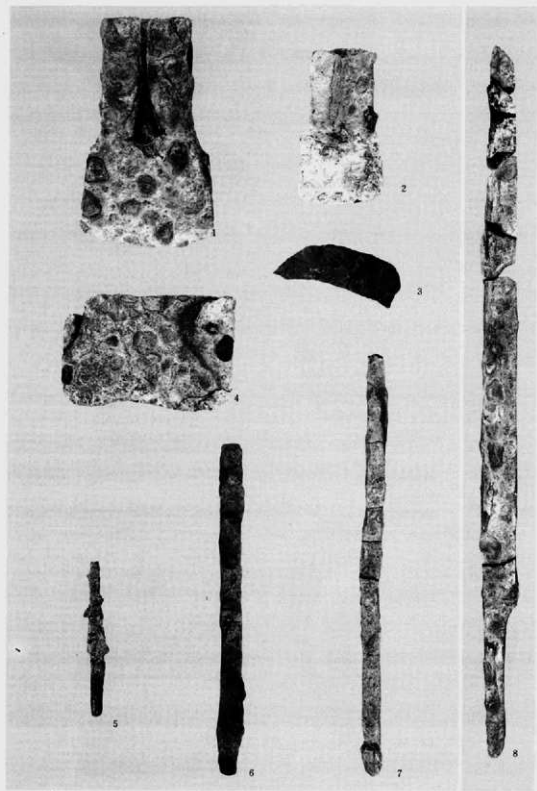
下：SX502（北から）



上 : SK101・SP103・SP104 (南から)

下 : SP101・SP102 (南から)





鉄器

山口県埋蔵文化財調査報告第90集

## 花岡遺跡

昭和61年3月

山口県教育委員会文化課  
編集 山口市滝町1-1

山口県埋蔵文化財センター  
山口市春日町3-22  
☎0839-23-1060

発行 下松市土地開発公社

印刷 兎玉印刷株式会社